

逆流性食道炎と食道裂孔ヘルニア発症における危険因子の検討

○佐藤里美 1)、佐藤寿子 1)、渡邊祐子 1)、玉坂洋子 1)、福島京子 1)、坂本弘明 1)、小原勝敏 2)

1) 公益財団法人福島県保健衛生協会

2) 福島県立医科大学消化器内視鏡先端医療支援講座

【はじめに】

逆流性食道炎や食道裂孔ヘルニアは従来、日本人に少ない病気であったが、食生活の欧米化などに伴い、近年では若年者から高齢者まで増加傾向にある。今回、これらの疾患との関連性を検討するために総合健診センター受診者を対象として食生活・食習慣について検討したので報告する。

【対象と方法】

平成26年4月から12月までの9か月間に人間ドックで上部消化管内視鏡検査を実施した1,060名を対象とした。得られた検査データ

をもとに、肥満、脂肪肝、LDL-C、中性脂肪、HbA1cを、問診事項からは、夜食習慣、寝る前の摂食、飲酒習慣、飲酒量を、それぞれ比例ハザード法により相対危険率を算出し、P値は0.05以下をもって有意差ありと判定した。

【結果】

受診者1,060名中168名（15.8%）に逆流性食道炎の所見があった。年齢別頻度は39歳以下では22/97（22.7%）、40歳代は31/241（12.9%）、50歳代70/386（18.1%）、60歳代30/273（11.0%）、70歳以上15/63（23.8%）であった。食道裂孔ヘルニアは1,060名中177名（16.6%）であり、年齢別頻度は39歳以下12/97（12.4%）、40歳代37/241（15.4%）、50歳代66/386（17.1%）、60歳代49/273（17.9%）、70歳以上13/63（20.6%）であった。逆流性食道炎発症の危険因子の検討では、肥満が相対危険率1.565（ $P = 0.0052$ ）、脂肪肝が2.731（ $P < 0.0001$ ）、LDL-Cが2.844（ $P < 0.0001$ ）、中性脂肪が1.631（ $P = 0.0031$ ）、HbA1cが1.232（ $P=0.3276$ ）、夜食習慣が

1.603 (P=0.0098)、寝る前の食事摂取が 1.535 (P = 0.0081)、飲酒習慣が 1.675 (P=0.0041)、飲酒量 (多量) が 2.360 (P=0.0010) であった。食道裂孔ヘルニア発症の危険因子の検討では、肥満が相対危険率 0.974(P=0.876)、脂肪肝が 2.101 (P < 0.0001)、LDL-C が 1.345(P<0.0531) 、中性脂肪が 1.843 (P=0.0003)、HbA1c が 1.005(P=0.9817) 、夜食習慣が 1.663 (P=0.0217)、寝る前の食事摂取が 1.243 (P = 0.1824)、飲酒習慣が 0.807 (P=0.1517)、飲酒量 (多量) が 0.820 (P=0.4193) であった。

【まとめ】逆流性食道炎と食道裂孔ヘルニアは男性に多く、年齢的にみると逆流性食道炎は 39 歳以下、50 歳代、70 歳代に多かった。食道裂孔ヘルニアでは年齢による有意差はみられなかった。逆流性食道炎発症の危険因子は、肥満、脂肪肝、LDL-C、中性脂肪、夜食習慣、寝る前の食事摂取、飲酒習慣、飲酒量 (多量) であり、食道裂孔ヘルニアの危険因子は、脂肪肝、中性脂肪、夜食習慣であった。【考察】今回の解析により、逆流性食道炎と食道裂孔

ヘルニアは、食生活・食習慣と密接に関連していることが示唆された。今後は、生活習慣病を防ぐためだけではなく、これらの食道疾患に罹患しないような生活習慣の指導が必要であると考えられる。